

漢代の説話画

Illustrations of Legendary Tales in the Han Dynasty
MORISHITA Shoji

森下章司

1 漢代の図像資料と説話画

(1) 漢代の図像

漢代には図像表現が大きな進展をみせる。神仙像をふくむ人物や動物、樹木、建物、星辰など題材が豊富になるとともに、それらの図像表現に一定の定式化がみられる。西王母・東王父、古代の皇帝や英雄や各階層の人物について、姿や動作に特徴をつけ、誰を描いたものが容易に判別できるような表現へと統一が進む。そうした共通のモチーフ・表現方法をそなえた図像が、各地でみられるようになることも定式化の一面である。

漢代における図像の発展をもっともよく示す資料が画像石であり、古くよりさまざまな研究がなされてきた。帛画や紙など有機質の図像資料が極めて乏しい状況で、中心的な検討材料の位置を占めている。

画像石に描かれた各種図像中で、近年急速に解明が進んでいるのが、一般に歴史故事図像と分類される絵画である。古代の帝王や英雄、刺客など歴史上の人物、孝子伝・列女伝の人物、そのほかの説話の人物などを描く。ここでは歴史・伝説などの区別をつけず、図像の物語的な面を重視することから、一定の物語をともなった図像を広く「説話画」と呼んでおく。

説話画においては、特徴や榜題によって題材が同定できたものも多いが、いまだ不明な図像もかなりの量にのぼる。たとえば「七女爲父報仇」と同定された図像は長らく主題が誤解されていたが、近年になって楊愛国〔楊 1998〕や邢義田〔邢 2002〕の研究により、伝世文献中には残っていない物語を題材としたものであることが明らかにされた。この例からみると、画像石の絵画中には同定されていない、あるいは誤った解釈がなされている図像がまだ残されているものと考えられる。

また敦煌文献をはじめとして、後世の文献との比較により、説話画のもつ新たな意味づけも進んでいる〔金 1989・2007 ほか〕。武氏祠画像石や和林格爾墓壁画の孝子伝図・列女伝図研究では、内容はよく知られた物語であるが、文献学的検討と図像の詳細な観察により、双方が細かい部分でよく一致することが示された〔黒田 2007 ほか〕。単に図像を同定するばかりでなく、図像の細かい表現内容と各種文献との比較検討が必要な段階となりつつある。

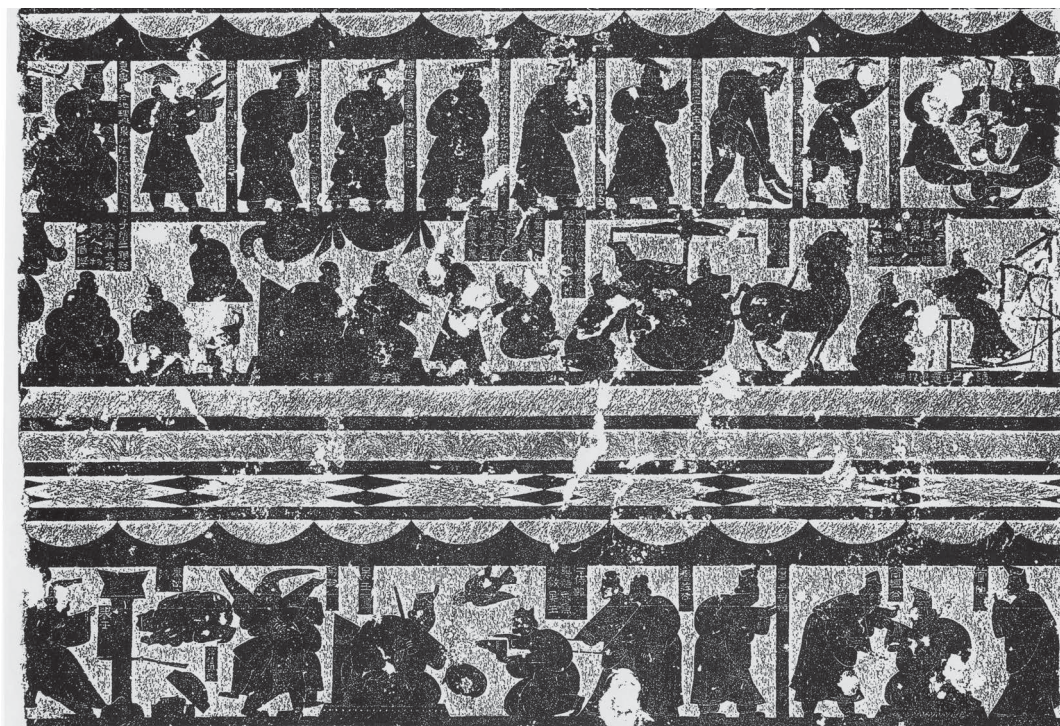


図1 武氏祠画像石 山東省嘉祥県

(2) 説話画と粉本

画像石などの漢代の説話画を検討した結果からは、そうした図像の手本となった粉本として、説話画や一種の絵巻物の存在が想定されている。紙や織物製と推定され、漢代の実物資料はいまだ出土していない。

武氏祠画像石を詳細に検討した長廣敏雄は、「武梁石室の畫象計畫はきわめて周到綿密な考慮をはらつて、上下3段のフリーズに、當時もつとも著名な説話を配置」しており、それは「あたかも畫巻をみるように、右から左へとつづいている」、「畫象石刻の原本として當時すでに畫巻形式の繪畫が存在していたという想像も否定しがたくなつてくる」と述べている〔長廣編1965 62頁〕。武氏祠画像石の整然とした図像配列や各像に付された榜題の様子（図1）から絵巻物状の粉本があったことを想定するのは自然であろう。米澤嘉圃も画像石と畫巻との関連を説く〔米澤1974〕。

本稿では、画像石以外に後漢代の銅鏡やその他の画像資料も利用することにより、こうした説話画の存在と形態内容について復元的な考察をおこないたい。漢鏡については、近年銘文研究が進んだ結果〔岡村2011 森下2011 ほか〕、画像石・壁畫の榜題と同じく、漢代の図像同定資料として威力を発揮することがわかってきており、画像石資料と組み合わせて新たな図像解釈も可能と考える。さらに、そうした図像解釈の結果をもとに、敦煌文学文献にみられる後世の俗文学資料と比較し、説話画の系譜についても考察を進める。

2 説話画の分析

漢代の画像石や銅鏡などに表された説話画の中から、とくに文学文献との関わりを想定できる図像を中心に取り上げて、検討を加える。

(1) 韓朋

敦煌文献中には「韓朋賦」と仮題のつけられた6種類の写本があり、それらを編集して一文としたものが1957年の『敦煌変文集』に納められている。宋王によって仲を引き裂かれた韓朋とその妻貞夫の物語である。『搜神記』巻十一にも「韓憑」「何氏」を主人公とする同様の物語を載せるが、こちらの方が内容は簡略である。

裘錫圭により、敦煌馬圈湾の烽燧遺址出土の漢簡中から韓朋賦の一部とみられる断片が見出され、この物語が前漢後期にまで遡ることが判明した〔裘1999〕。簡の裏には「百一十二」という数字が入れられており、これを篇号とすれば、すでに漢代において、ある程度の長さをもった物語として存在していたことが推定できる。また辺境地域の宿管所からこの簡が発見されたことは、この物語が漢代において相当程度の範囲に広まっていたことを示す。さらに2006年には王牧によって浙江省出土および個人蔵の漢代画像鏡にもこの図柄が採用されていることが紹介され、漢代におけるこの物語の普及の広さが示された〔王牧2006〕。

韓朋賦の物語の中で、ここでの図像検討と関係する部分を抜き出して記す。

韓朋は妻の貞夫と離れ、宋国に仕えて3年が過ぎた。貞夫が出した手紙を偶然手に入れた宋王は彼女をさらって強引に妃にしてしまう。しかし貞夫は夫のことが忘れられず、病に伏せる。そこで宋王は若く美男の韓朋を打擲させ、貞夫にあきらめさせるように仕向け、清陵台の建築に携わる人足の身分に落としてしまう。それを知った貞夫は清陵台を見学に行くと称し、そこで馬飼いをしている韓朋に出会う。言葉を交わした後、衣の一部を切って血書をしたため、矢の先に結んで朋に射る。矢文を読んだ朋は自ら命を絶つ。貞夫もその墓に身を投げる。その後、二人の墓から二本の樹が生え、またそこから鴛鴦が生まれ飛び去ってゆく。

銅鏡と韓朋賦

先に触れたように後漢代の画像鏡に、この物語図像を描いたものが2面知られている〔王牧2006〕。浙江省杭州市余杭星橋鎮で発掘された周是作銘の貞夫画像鏡（図2 以下浙江鏡と略称）および孔震氏蔵の柏氏作銘貞夫画像鏡である〔孔震氏鏡 中国銅鏡研究会2012〕。

浙江鏡には「貞夫」「宋王」「侍郎」の榜題がそれぞれ女性像や男性像に付されており、貞夫と宋王を表したものであることが明らかにされた〔王牧2006 岡村2011〕。「韓朋賦」の古い時期における図像表現がはじめて知られることとなり、そうした図の存在が漢代に遡ることが確認されたのは重要である。

図像内容については王・岡村両氏によって紹介されているが、さらに詳しく検討した結果、本鏡の図像は「韓朋賦」の描く場面とかなり細かい部分まで共通することがわかった。

浙江鏡に表された貞夫は、単に両手を上げているだけの姿に見えるが、孔震氏鏡と比較すると、

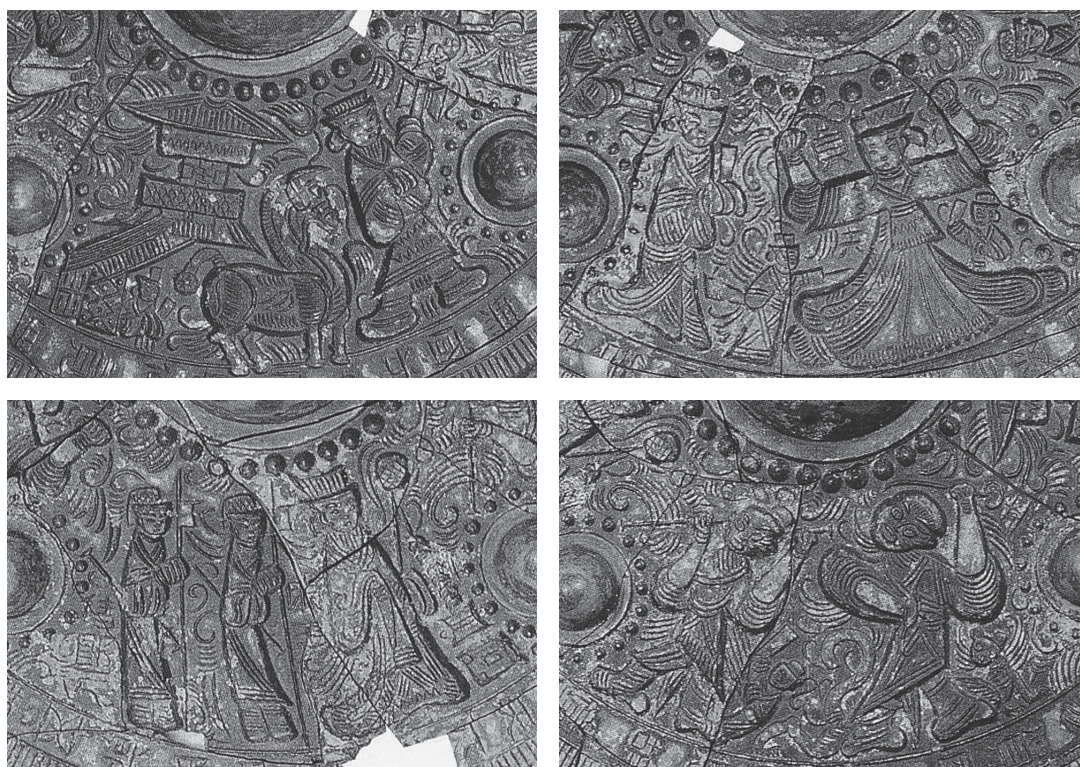


図2 韓明画像鏡 浙江省杭州市余杭星橋鎮

本来は弓を手にして矢を放った姿であることがわかる（図2右上）。「韓朋賦」に描かれた矢文を射た場面を表す。その左横の区画に描かれた、後ろに馬を連れた人物が韓朋である（図2左上）。貞夫から受け取った書状を手にしている。「韓朋賦」に馬飼いに貶めれたとある通りである。その横の高樓は、宋王が建設を命じ、韓朋が働かされていた清陵台にちがいない。この2つの区画は、貞夫と韓朋がこの世で出会った最後の場面を劇的に表したものとみることができよう。

他の2区画のうちひとつ（図2左下）は宋王と付人を描いたものであることが榜題から知られるが、もう1つの区画の像（図2右下）には榜題がない。図像は武器をもった2人の人物が、足元の小さな人物に制裁を加えているようにみえる。

これは宋王の部下が韓朋を痛めつけている場面を描いたものとみることができる。この韓朋も書状らしきものを手にもつ。このようにみると本鏡の内区はすべて、「韓朋賦」の場面を描いたものということになる。また矢文、清陵台、馬など、物語の基本要素もすでに備わっていることが理解される。

宋王の命による制裁場面と清陵台における貞夫と韓朋の最後の出会いという連続する2つの場面を表したものとするなら、図像表現史上の意義も大きい。漢代の説話画において、主たる場面に、別の段階で登場する人物など付け加えた「補足式」の存在は認められているが、「連続式」とされる場面構成に関しては、「少なくとも漢代までは時間的推移をあらわす方法はなかったというほかはないようである」とされている〔米澤1974〕。銅鏡の図像は明らかに時間的に連続する場面を表している。

こうした特徴をもった図像が、少数例しかない銅鏡図像の中で創造されたものとは考えられず、画卷のような粉本の存在を想定できる。銅鏡はそれを部分的に写したものである可能性が高い。漢代において、連続する場面ごとに絵を変え、複数の場面で構成される説話画があったものと想定されるのである。両鏡の年代は1世紀前後に位置づけられ、この時期の江南地方において、そうした説話画が普及していたものと想定できる。

画像石資料

この銅鏡図像を参考にすると、画像石中にも韓朋物語と関連する図像の存在することが浮かび上がる。

山東省嘉祥県城南南部出土画像石〔頼 2000 133〕や武氏祠左石室後壁小龕東壁〔蔣・呉 2000 83〕に表された図像では、上記の銅鏡と相似た人物群が描かれている。手に鋤と荷物をもって建物の階段を駆け上がろうとしている男と、それに向って矢を放った女の立像、周囲の人物からなる。

これに関しては、舜が継母に屋上に追い立てられている場面とみる説もある〔蔣・呉 1995 77頁など〕。しかし中央研究院所蔵の山東省出土画像石拓本（図3）をみると、女性の放った矢は男の抱える袋に刺さり、矢柄の部分から文が吊下げられていることがわかる（図4）。女性が矢文を男に与えた場面であると理解でき、先の清陵台における貞夫・韓朋の場面と重なる。韓朋が後ろ向きに逃げている様子は銅鏡と異なるが、鋤を手にした姿は清陵台の土木工事に従事させられていたことを表すものにちがいない。貞夫と出会って自らを恥じて清陵台に逃げる韓朋に、貞夫が矢文を射た姿を描いたものとみることができる。

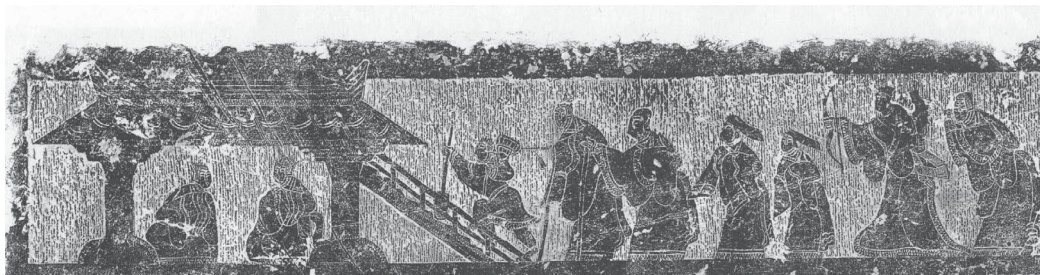


図3 「韓朋」画像石 中央研究院所蔵拓本



図4 「韓朋」 中央研究院所蔵拓本

山東省平邑県にある皇聖卿石闕は元和三(86)年の紀年があり、同様の図像を表す。表現はやや簡略で、また清陵台にあたる建物表現はない(図5)。西面の最上段に3人の人物が表されるが、左端の人物に「宣王」ないし「宋王」、中央の弓をもつ女性像に「信夫」、右端の女性から逃げるような姿の人物に「孺子」の榜題がともなう。ほぼ同時代で同じ図像をもつものが、山東省長清県孝堂山石祠東壁にもある〔蔣・呉2000

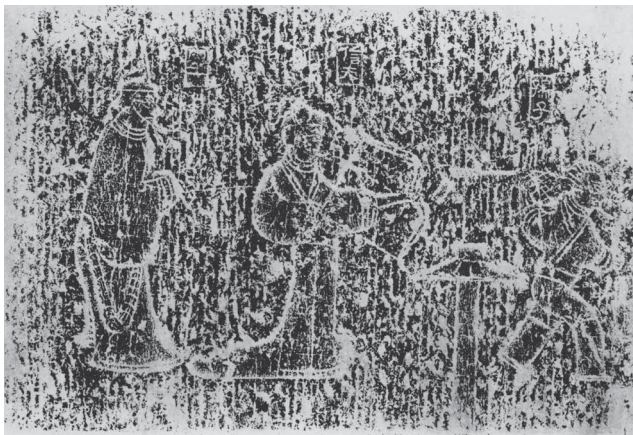


図5 「韓朋」画像石 山東省平邑県皇聖卿石闕

42]。矢文を射る女性の名が「貞夫」ではなく「信夫」となっているが、双方とも美称であり、貞節な女主人公をさすものだろう。『搜神記』でも女は別名である。女の後ろにいる人物の榜題が「宋王」と読めるなら「韓朋賦」と一致する。

銅鏡と画像石の間で、同じ場面の描写が異なることにも注意したい。銅鏡の方では韓朋は馬飼に身をやつしており、画像石の方では鋤を手にした土木人夫として描かれ、かつ貞夫を避けて逃げる姿に表す。同時期に少し筋の違う異本が存在し、それを写したことを示すのではないだろうか。敦煌の「韓朋賦」においては、清陵台の建築工事へ派遣されながら、次には馬飼となっており、話の筋に不整合な部分がみられる。そうした異系統テキストの混淆によるものかもしれない。

こうした図柄は先の皇聖卿石闕の作られた1世紀後半から、武氏祠画像石など2世紀後半に至るまで続き、その表現方法は洗練されてゆく。山東省の画像石に数多くの例をみることができ、銅鏡の産地である江南とは異なる地域で、やや筋立てに違いをもつ形でこの物語が流行した可能性を示す。

(2) 伍子胥

伍子胥画像鏡

伍子胥の像は墓葬装飾としては例が少なく、一方銅鏡図像に多い。ただしほとんどは2世紀前半の呉派の画像鏡に限られ〔岡村2011〕、表現もほぼ共通する。「忠臣伍子胥」などの榜題が付属し、伍子胥に関わる図像であることは確実である(図6)。

内区を4つの乳で区分し、そのうちの「忠臣伍子胥」の榜題をもつ像は怪異な風貌に描き、右手を前に差し出し、左手に剣をもって自刎せんとする姿を示す。伍子胥が手を差し出す先の区画には、



図6 伍子胥画像鏡 個人蔵

「呉王」の榜題をともなう、帳内の座像がある。呉王は身体を隣の区画の「二女（別の鏡で「越王二女」と記すものがある）」に向け、顔のみ伍子胥の方を振り返る。伍子胥の反対側の区画には「越王」「范蠡」の榜題をともなう2人が向かい合う。

これも伍子胥の物語の一連の場面を描いたものと理解できる。越王と范蠡の謀略によって惑わされた呉王は伍子胥に剣を賜り、自死を命ずる。二女は呉の臣を籠絡するために送り込まれた婦人たちを示すのであろう。呉王の身体は二女の方に向けているものの、顔は伍子胥の方に振り向いているのは、死を命じたときの姿であろうか。越王と范蠡は向かい合い、計略をめぐらしているかのようである。韓朋鏡とは違って各区の登場人物は異なり、時間差をもつ場面を描いたものではないが、それぞれ互に関連する一連の場面を描いたものと理解できる。構成・表現法ともに劇的な効果をめざしたもので、物語性が強い表現となっている。

画文帯対置式神獸鏡

韓朋とは異なり、伍子胥は『春秋左氏伝』、『春秋公羊伝』、『呂氏春秋』、『史記』などさまざまな書物に登場する歴史上の著名な人物であるから、以上の図像の由来は限定しにくい。ところが、この問題に関連する手がかりとなる、伍子胥の図像をもつ別の鏡式が近年紹介された。

『鏡涵春秋』113 掲載鏡は典型的な画文帯対置式神獸鏡であり、2世紀後葉の製品と位置づけられる[深圳市文物管理辦公室・深圳博2012]。西王母・東王父とそれをはさむ獸像というこの鏡式に一般的な図像とともに、「子胥」「漁父」の榜題をもつ2人の人物像を配する点が注目される(図7)。2人は向かい合い、「漁父」は一方の手に魚を刺した棒をもって伍子胥の方に差し出し、もう一方の手に先が三叉となった漁具状の器具をもつ。

楚の平王に父と兄を殺された伍子胥は呉に逃れるが、その途中で漁父の助けを得る。『史記』伍子胥伝にも描かれた2人の出会いの場面を描いたものであるが、伍子胥に関わるさまざまな事跡の中でこの図像が採用されたのは、物語中のとくに中心的な場面であったからと想定できる。伍子胥の事跡は『史記』においても物語的様相の強い記述がみられるが、後世文献になるほど伝説的な要素が増す。そして敦煌文書には、物語化した伍子胥の物語「伍子胥変文」が存在する。



図7 伍子胥・漁父画文帯対置式神獸鏡 個人蔵

金文京は「伍子胥変文」の「実は全体の約六割にもあたるスペースが、なんと伍子胥が呉へと逃走する道中の描写によって占められている」ことを強調し、「伍子胥の遍歴」を語った、古今東西に数多くの類似形式をもつ「道行きの文学」の一種であると評価する〔金1989〕。この道行の中でも漁父との出会いの場面では2人のやり取りが多く割合を占め、またその後漁父は入水し、それが後の物語の伏線ともなる。すなわち、この場面は物語のクライマックス部分と位置づけられる。韓朋図と同じく、本鏡の図像の背景には伍子胥の物語を描いた説話画が想定できる。それは漁父との出会いや自死など複数の場面から構成される画卷であったものと考えられる。

以上に取り上げた伍子胥や韓朋、また後で触れる孝子伝を図柄に取り入れた鏡は、呉の領域の製品という点で共通し、この地域では銅鏡製作に物語図像を取り入れることが一部で流行したものとみることができる。

なお写真や模写図が明確でなく、図像の細かい特徴が不明であるが、後漢末の内蒙古・和林格爾墓の壁画にも「伍子胥逃行」の図があったらしい〔内蒙古研究所1978 陳・黒田2009〕。後漢代において、この逃避行を中心とした伍子胥の物語と図像が広い地域で流行していたことを物語る。

(3) 孔子・項託・老子

山東省を中心とした画像石墓によくみる図像として、「孔子見老子」図（図8）がある。孔子と老子が向かい合った姿に描くのが基本で、孔子の背後に弟子が列をなすものもある。この2人の間にはしばしば輪車を持った小児が描かれている。和林格爾墓壁画の榜題などから、孔子と議論して打ち負かした子供、項託（橐）を表したことがわかる。

孔子が老子と会見した話自体は、『莊子』天道篇や『史記』孔子世家ほか各種の文献に登場する。一方、孔子と項託との話も漢代の文献に各種存在する。

また敦煌文書中にも「孔子項託相問書」

がある。17種類という通俗文学関係の写本ではもっとも数が多く、またチベット語訳もあり、唐代においてこの作品が流行していた可能性が高いという〔金2007 242頁〕。

さらに金文京は『玉燭宝典』に引く『高士伝』の逸文に「孔子が大項橐とともに老子に学び、その後、大項はにわかに童子となって、蒲車を押して遊んだ」とする記述があることを指摘し、漢代の画像石の図像表現とよく対応することも示した〔金2007〕。老子もからんだ3人の智者に関する物語が漢代に流行していたことは間違いない。図像資料としては1場面しか知られていないが、そうした物語を描いた説話画が漢代に存在したことも知られる。

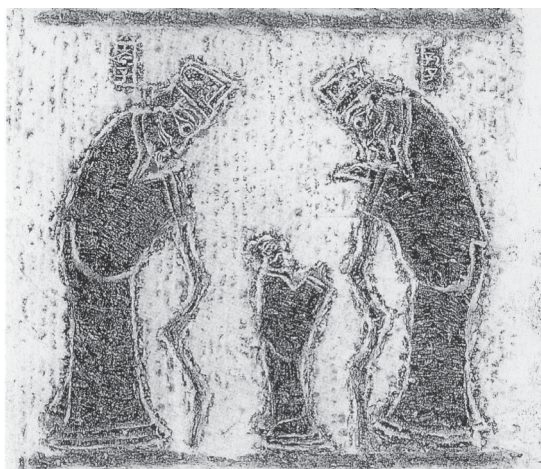


図8 孔子・項託・老子画像石 山東省嘉祥県紙坊鎮

(4) 孝子伝・列女伝—董永・魯秋胡

黒田彰の研究により、漢代の孝子伝・列女伝図像解析に関してはめざましい成果があげられている。この時代の孝子伝の本体は中国では散逸し、各種の典籍に引用された形で残される。武氏祠画像石および和林格爾墓の壁画は数多くの孝子像を表すもので、多くに榜題が記されていて図像同定の基本資料ともなっている。この図像・榜題と詳細に比較検討した結果、日本に残された陽明本・船橋本の二書の孝子伝が漢代の例との共通性が強く、現在ある資料の中で、古い時代の孝子伝の記述をもっともよく伝えるものであることが明らかとなった〔黒田 2007・2008・2010a・b〕。またこれらの孝子伝および列女伝における各説話の配列と、武氏祠・和林格爾壁画墓における図像の配列とはよく一致している。先にも述べたように、図像と物語を描いた絵巻物的な粉本があったとみる考えの傍証ともなる。

董永

漢代の孝子伝図は、武氏祠画像石や和林格爾墓壁画のように、各孝子ごとに一場面で表現し、それらを列状に配列したものほかに、一孝子の物語を取り上げ、単独で用いたものがある。その中でももっともめだつのは董永の図である（図9）。黒田彰は、四川の漢墓装飾にしばしば董永の像が用いられていることに注目し、武氏祠の董永図とはほぼ同様の表現であることを明らかにした〔黒田 2007〕。老父を鹿車に載せて耕作に出た姿で、董永は老父の方を案じてしばしば振り向く。陽明本や船橋本の孝子伝に「一鋤一顧」と記されたままの図像が漢代の資料にみられることは実に興味深い。

漢代の四川では墓葬やさまざまな器物に独特の図像表現が発達しているが、孝子伝に関連する図像では董永がめだつ。この地域では、孝子伝中でもとくに流行した説話であった可能性が高い。

北魏画像石棺にもこの物語の図像があるが、先と同じ耕作に努める董永と老父に加え、それには董永を助けるために婚姻した天の織姫の姿も描く。今に伝わる孝子伝とは異なり、董永の父の生存中に天の織姫が天降ってその孝をたすけるという物語が存在した可能性が示されている〔西野 1955〕。

敦煌文書には「董永変文」と題する韻文がある。ただし、そこでは老父に孝養した部分よりも、天女との間に生まれた子の話が主体を占める。北魏の石棺に描かれた董永像は、この老父への孝養



図9 董永画像石 四川省渠県沈氏石闕

と天女との出会いの双方の話が一場面に盛り込まれたものとも想定される。その伝承のあり方はストレートなものとしては説明できないが、漢代には孝子伝の一部の人物を取り上げてさらに物語化を進めていた可能性がある。

魯秋胡

四川の墓葬装飾にみられる説話画像として、『列女伝』中の魯秋胡の像がある（図10）。別国に仕官していた秋胡が帰郷の途中、桑の葉を摘む女性に声をかけるが、それは妻であった。夫の不貞を恥じた妻は身を投げる。四川では石棺などに、この妻に声をかけた場面が好んで描かれている[高・王2003 江2002]。この説話もまた「秋胡変文」と題されたものが敦煌文書中に存在する。

なお四川の墓葬装飾に用いられた『列女伝』関係の像としては、梁高行を表した図も知られている[高2011 152・186・410]。



図10 魯秋胡・季札画像石棺 個人蔵

孝子伝図の系譜

漢代における『孝子伝』『列女伝』の図像表現には2種類の方式があったものと考えている。ひとつは武氏祠画像石や和林格爾墓壁画のように、多数の孝子・列女を並べ、列伝風に配する方式である。もうひとつは特定の登場人物を取り上げて表す方式である。上にとりあげたように、後者は四川の後漢墓・石闕に多く例をみる。図柄自体に大きな差はないが、後世に「董永変文」「秋胡変文」のように独立した物語が成立していることからみて、その始まりが漢代にあった可能性も考えられる。

村上英二氏蔵鏡の中に、「曾子母」「曾子」「閔騫父」との榜題をもつ珍しい漢鏡がある[西村1994 49鏡, 山川2003]。内区の1区画に織機の前に座る曾参の母と曾参の姿が表され、さらに2人の後方に「閔騫父」の榜題をもつ座像がともなう。西村俊範は「山東省嘉祥県の武氏祠画像石に描かれる孝子伝図17種のうちに、この両者が同一の配列で描かれていることが注目される」と述べる。

武氏祠の閔子騫図と比較すると、村上氏鏡に描かれた座像は閔子騫を表すもので、隣に描かれるはずの馬車とそれに乗る閔子騫父の図は省かれた格好となっている。こうした状況は、絵巻風につながった絵図の一部を切り取って模倣したものとして理解できる。本鏡の製作年代は1世紀前後に位置づけられ、武氏祠に先行し、後漢前半における列伝形式の画卷の存在を示す材料となろう。

3 説話画の系譜

(1) 敦煌文献との関連

以上のように漢代の画像石・銅鏡など図像資料にみられる説話画を通して、一連の場面を連続的に表現する技法や複数の関連する場面で構成する方法が漢代に登場していたことを示した。さらに、その手本として画卷形態と推定される粉本が存在した可能性を説いた。韓朋や伍子胥のように、波乱に満ちた物語のもっとも劇的な場面を強調する表現方法も成立しており、後漢代には説話画表現が大きく発達していたこともうかがえる。

それぞれの検討において触れたように、そうした説話画の題材と敦煌文学文献と共通する例が多いことを重視したい。「韓朋賦」、「伍子胥変文」、「孔子項託相問書」、「董永変文」、「秋胡変文」など、仏教関係以外の敦煌文学文献のかなりの部分が、漢代に説話画として存在していたことを確かめられるのである。敦煌の非仏教的な文学関係文献中で、上のように漢代の画像表現と共通する題材を用いたものが4分の1近くあることになる。

敦煌の非仏教文学文献の淵源が、漢代の民間伝説に端を発したのではないかという推定もすでになされている〔裘 1999〕。韓朋の物語を表現した漢代の銅鏡・画像石図像は、敦煌の「韓朋賦」と物語の細部に至るまで共通するところが多い。物語の基本形式がすくなくとも1世紀には成立し、それが長く形を保って伝承されたこととなる。これは中国における俗文学の系譜を考える上でも重要な材料となるだろう。

それらにともなう図像表現も漢代に確立していた以上、こうした物語の継承や流布において絵が重要な役割を果たしていた可能性が示唆される。

(2) 絵解きと図像

敦煌文学文献の研究によって、唐代における唱導文学の実態が明らかにされ、それにともなって「絵解き」が重要な役割を果たしていたことも注目された〔那波 1950 など〕。

「隆魔変文」は画と唱導との結びつきを考える上で注目されてきた資料である〔秋山 1964〕。画卷に仏弟子と外道の法力くらべの様子が5つの場面に描かれ、さらに紙の裏側の、終わり近くの各部分に韻文体の詞書が墨書される。俗講のような布教の場において、「絵解き」的な用い方をされたものと推定されている。「隆魔変文」以外にも、文字部分しか残されていない変文に図画との併用を意味する記述をもつものがある〔那波 1950〕。唐の吉師老の「看蜀女轉昭君變」には、画卷を開きながら昭君變を囀じた蜀女の姿が描かれている〔澤田 1975〕。

敦煌文学文献との系譜的なつながりからみて、漢代の説話画の一部についても、このような絵解きの使用法があった可能性は考えられるだろう。「韓朋賦」の「貞」、伍子胥の「忠」のように、徳目的な主題を有する物語が多くを占め、後世のものと形式は異なるだろうが「講」のような使用形態も想定しうる。

ただ以上の文学文献は雑多な形式からなり、すべてが唱導に用いられたわけではない。「伍子胥変文」は説唱体にはいるが、「董永変文」「秋胡変文」は仮に変文と名付けられているものの、範疇に入れるのは無理がある〔金 2000〕。「韓朋賦」については、全体としては「散文としての色彩が

きわめて濃いもの」で、「耳から伝えられたテキストなのではなく、テキストからテキストへ伝えられたもの」とされる〔西川2007〕。これらを一括して「語りもの」形式であったとはできないが、説話画と併用してこれらの物語が継承された可能性を考えておきたい。

(3) 文字と絵のむすびつき

直接的な系譜は措くとしても、敦煌文学文献資料から遡って類推しても、漢代において、文字と図を併用して説話を表した文献が存在した可能性は高い。それは画卷状のものであったと考えた。

後漢代においてこうした説話が広い範囲に流布した背景も、そのような表現形式が寄与したものみることが可能である。語りと絵の併用は、非識字層に対しても有効な伝達効果を与える。語りものではなくとも、絵によって印象的な効果は高められる。画像石や銅鏡の出土地にみられたように広い地域で、ひとつの説話が共有・定着された背景には、このような漢代における新たな表現形式の成立を想定できるのではないだろうか。持ち運びの容易な画卷の存在を想定すれば、広い地域できわめてよく似た図像が共有された背景も説明できる。

このような図像と文字の併用は、文字とそれをふくむ知識の幅広い普及を前提として成り立つものであり、文字使用法の発達・普及の段階を示すものでもある。

謝辞

本論については、平成26年2月に京都大学人文科学研究所・中国古鏡の研究班で発表をおこない、岡村秀典、金文京先生をはじめとして参加者からいろいろ御意見を頂戴した。

韓国画像鏡は平成23～24年度科学研究費挑戦的萌芽研究「後漢鏡芸術論—作家論による型式学の再検討」（研究代表者岡村秀典）による浙江省の銅鏡調査で実見することができた。また四川の図像資料に関しては、平成24～27年度科学研究費補助金基盤研究B「五斗米道の成立・展開・信仰内容の考古学的研究」（研究代表者森下章司）の調査検討成果を活用している。それぞれの調査でお世話になった王牧、王綱懷、孔震、霍巍、秦臻、岡村秀典、黄曉芬先生に心より御礼申し上げます。

参考文献

- 秋山光和 1964 「変文と絵解きの研究」『平安時代世俗画の研究』、吉川弘文館、387-454頁
入矢義高(編訳) 1975 「変文」『仏教文学集』中国古典文学大系60、平凡社、1-165頁
梅原末治 1939 『紹興古鏡集英』、桑名文星堂
王相臣・唐仕英 2003 「山東平邑県皇聖卿闕、功曹闕」『華夏考古』第3期、15-24頁
王恩田 1992 「秦安大汶口漢画像石歴史故事考」『文物』12期、73-78頁
王士倫(編著)・王牧(修訂) 2006 『浙江出土銅鏡(修訂本)』、文物出版社
王 牧 2006 「東漢貞夫画像鏡賞鑑」『収蔵家』第3期、71-74頁
岡村秀典 2011 「後漢鏡銘の研究」『東方学報』京都第86冊、京都大学人文科学研究所、1-90頁
岡村秀典 2012 「後漢鏡における淮派と呉派」『東方学報』京都第87冊、京都大学人文科学研究所、528-488頁
金岡照光(編) 1990 『敦煌の文学文献』講座敦煌9、大東出版社
菅野恵美 2012 『中国漢代墓葬装飾の地域的研究』、勉誠出版
裘 錫圭 1999 「漢簡中所見韓朋故事の新資料」『復旦学報』第3期、109-113頁
金 文京 1989 「「伍子胥列伝」と「伍子胥変文」—『史記』の神話と文学—」『史記・漢書』鑑賞中国の古典第7巻、角川書店、438-464頁

- 金 文京 2000 「敦煌變文の文體」『東方學報』京都第 72 冊，京都大学人文科学研究所，243-265 頁
- 金 文京 2007 「孔子の伝説—「孔子項託相問書」考—」『説話論集』第 16 集，清文堂出版株式会社，237-264 頁
- 黒田 彰 2007 『孝子伝圖の研究』，汲古書院
- 黒田 彰 2008 「列女伝図の研究—和林格爾後漢壁画墓の列女伝図—」『京都語文』15，佛教大学国語国文学会，33-78 頁
- 黒田 彰 2010a 「列女伝図の研究(2)—和林格爾後漢壁画墓の列女伝図—」『文学部論集』第 94 号，佛教大学文学部，1-19 頁
- 黒田 彰 2010b 「列女伝図の研究(3)—和林格爾後漢壁画墓の列女伝図—」『京都語文』17，佛教大学国語国文学会，97-131 頁
- 邢義田 2002 「格套，榜題，文献与画像解釈」『中世紀以前的地域文化，宗教與藝術』，中央研究院歷史語言研究所，183-234 頁
- 邢義田 2011a(原刊 1986) 「漢代壁画的發展和壁画墓」『画爲心声』，中華書局，1-46 頁
- 邢義田 2011b(原刊 1996) 「漢代画像内容与榜題的關係」『画爲心声』，中華書局，69-91 頁
- 高 文(編) 1987 『四川漢代画像磚』，上海人民美術出版社
- 高 文(編) 2011 『中国画像石棺全集』，三晋出版社
- 高文・王錦生 2002 「四川新津縣漢代画像石棺上之新發現」『四川文物』5 期，61-71 頁
- 高文・王錦生 2003 「四川新津縣漢代画像石棺上之新發現(二)」『四川文物』6 期，70-74 頁
- 江 玉祥 2002 「漢画<列女図>与<秋胡戲妻>図像考」『四川文物』3 期，42-49 頁
- 項 楚 2006 『敦煌變文選注(增訂本)』，中華書局
- 澤田瑞穂(原論文は 1939 刊) 1975 「唱導文学の生成」『佛教と中国文学』，国書刊行会，1-66 頁
- 徐文彬・譚遙・樊廷萬・王新南 1992 『四川漢代石闕』，文物出版社
- 蔣英炬・吳文祺 1995 『漢代武氏墓群石刻研究』，山東美術出版社
- 蔣英炬・吳文祺(編) 2000 『中国画像石全集』1 山東漢画像石，山東美術出版社
- 深圳市文物管理辦公室・深圳博物館・深圳市文物考古鑑定所 2012 『鏡涵春秋』，文物出版社・河南美術出版社
- 曾昭燁・蔣寶庚・黎忠義 1956 『沂南古画像石墓發掘報告』，南京博物院・山東省文物管理處
- 中国古鏡の研究班 2011a 「後漢鏡銘集釋」『東方學報』京都第 86 冊，京都大学人文科学研究所，201-289 頁
- 中国古鏡の研究班 2011b 「三国西晋鏡銘集釋」『東方學報』京都第 86 冊，京都大学人文科学研究所，291-333 頁
- 中国銅鏡研究会 2012 『古鏡今照 中国銅鏡研究会成員藏鏡精粹』，文物出版社
- 陳永志・黒田彰(主編) 2009 『和林格爾漢墓壁畫孝子傳圖輯録』，文物出版社
- 鄭 岩 2006 「關於漢代喪葬画像觀者問題的思考」『中国漢画研究』第 2 卷，中国漢画学会・北京大学漢画研究所，39-55 頁(『美術研究』第 395 号，2008 年に翻訳)
- 内蒙古自治区文物考古研究所編 1978 『和林格爾漢墓壁画』，文物出版社
- 長廣敏雄(編) 1965 『漢代畫象の研究』，中央公論美術出版
- 那波利貞 1950 「俗講と變文」『佛教史學』第 2 号，60-71 頁，第 3 号，73-91 頁，第 4 号，39-65 頁
- 西川幸宏 2007 「「韓朋賦」の性格をめぐる」『待兼山論叢』文学篇 41，大阪大学文学部，35-49 頁
- 西野卓治 1955 「董永傳説について」『人文研究』6 卷 6 号，大阪市立大学文学部，433-477 頁
- 西村俊範(監修) 1994 『古鏡コレクション 開明堂英華』，村上開明堂
- 繆 哲 2011 「孔子師老子」『古代墓葬美術研究』第 1 輯，文物出版社，65-120 頁
- 傅 惜華(編) 1950 『漢代畫像全集』初編，巴黎大学北京漢学研究所
- 文物圖象研究室漢代拓本整理小組(編) 2004 『中央研究院歷史語言研究所藏 漢代石刻畫象拓本精選集』，中央研究院歷史語言研究所
- 巫 鴻 2006 『武梁祠—中国古代画像藝術的思想性』，三聯書店
- 森下章司 2011 「漢末・三国西晋鏡の展開」『東方學報』京都第 86 冊，京都大学人文科学研究所，91-138 頁
- 山川誠治 2003 「曾參と閔損—村上英二氏藏漢代孝子伝図画像鏡について—」『佛教大学大学院紀要』第 31 号，95-102 頁
- 楊 愛国 1998 『不爲鑑賞的画作』，四川教育出版社
- 楊 愛国 2005 「漢代画像石榜題略論」『考古』5 期，59-72 頁
- 米澤嘉圃 1974 「中国古代説話畫の表現方法」『文学』VOL.42，岩波書店，49-57 頁
- 羅二虎(渡部武訳) 2002 『中国漢代の画像と画像墓』，慶友社

頼 非(編) 2000 『中国画像石全集』2 山東漢画像石, 山東美術出版社
劉雲濤 2005 「山東莒県東莞出土漢画像石」『文物』第3期, 81-87 頁
Finsternbusch, Käte 1971 *Verzeichnis und motivindex der Han-Darstellungen*, Otto Harrassowitz・Wiesbaden

挿図出典

- 図1 蔣・吳(編) 2000 49
図2 王(編)・王(修訂) 2006 彩版11
図3 文物圖象研究室漢代拓本整理小組(編) 2004 79
図4 文物圖象研究室漢代拓本整理小組(編) 2004 79
図5 傅(編) 1950 Fig.217
図6 劉軍氏藏鏡
図7 深圳市文物管理辦公室ほか 2012 113
図8 頼非(編) 2000 115
図9 徐ほか 1992 169
図10 高文(編) 2011 237

(大手前大学総合文化学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2014年1月7日受付, 2014年7月28日審査終了)